



重修真書太閤記

六編  
四



18  
門  
459  
卷  
54

消  
福  
派

重修真書太閤記六編卷之十

福島正則日畑城中ふくしまのりつねひえのくさくさ小て勇氣いさぎの事

并小西弥九郎竹井やまにしやひささぶろたけいを説伏しきまる事 附盲人もくらひ働はたらの事

同  
會  
印  
攻

備中國都宇郡日畑城ひつちう小ハ日畑六郎兵衛を大將おほしやうとして檢けん使し上原右衛門大夫元祐かみはらゑもんたいふげんを差添さそ其勢いきせ一千五百餘人を籠かごら  
ま其外そのほか小竹井總たけい九衛門成光なりみつ桂源けいげん左衛門兼政さゑもんけんせいを加番かばんとして  
て置おけれる元來もとより上原右衛門大夫元祐かみはらゑもんたいふげんハ元政もとせい秀包ひでたけの妹婿いもむこ  
小して隆景たかかげ元春もとはるハ親おやしき一族いそあり

日畑ひえのくさくさハ高松たかまつより西南せいなん小當あはふ今八百五石許いまはちひゃくごじやくごの村むらあり元  
政もとせいハ少輔せうぶ六郎秀包むつろひでたけハ藤四郎ふじしやうと云い共とも元春隆景もとはるとたかかげの弟あに也

大月巳六編卷之十

大目言一編卷之十  
然るは日畑六郎兵衛季則ハ大力ハ猛勇なる小誇り上  
原ヲ輝元朝臣の叔母壻トシ諸人の尊敬を却ささみ  
し日頃無禮をふける故元祐も季則と不快不睦暮し  
けふ然る小今度羽柴筑前守秀吉當國へ發向し冠山忍山  
鎌倉り峯の三城を暫時小攻落し其競ふ來り頓て日畑鳴  
高松へ押寄へト云共就中日畑ハ大井川を西ふり東  
小乳吸川を帶したり案内を知りて深入せん正良策と  
云へりはとて間者を入城中の形勢を伺ふは城の大將季  
則ハ勇有て智浅く元祐ハ柔弱小ハ武勇小乏く竹井  
成光ハ小身小ハて貧乏厭とを知桂兼政ハ私慾多く諸  
人ハ疎まる是小より城中の諸將心々小ハて一致せんと

注進一けれハ秀吉聞て究竟の正否持あま夫小從之謀を  
施こさるやと思案一ける処へ又一人の間者立返り注進  
一けるハ竹井總左衛門尉藝州ふて石川ハ三百貫を領と  
り其上身上不如意ふて妻早世一けれハ年來め一仕ひ  
女を妾と一て當地までも連來り一ハ懐胎一月満て男子  
をうむ但雙生ふ上盲なり世の聞之を憚り親子共この  
日畑の在所ハかまし置けるハ成人一て今歳十八歳音曲  
を學をせけるハ天性の名人ハ一部の平家とてそや  
され俊都悟都とそやけると之秀吉夫志軍中鬱散の為  
ハ善ふん早々召連來るへ一と有一ハ彼間者速ハ兩  
盲人を同道一筑前守の本陣へ伴ふひける筑前守ハ兩盲

人を傍近く呼ぶを名づつ平家一段語せて聞かば増し名  
人かふと賞翫一金銀多く與へ種々馳走し然して後秀吉  
宣ふ様其方共此陣中少逗留し某側少く平家をかき置  
皆彈く我を慰め我飯陣の時京都へ連返り檢校ふふさ  
んと思へとも其方共望まはふさや如何ふさやと尋ふへ  
そ兩人とも頭を地又付お難有仰かふさ山家子住  
居居るの三好ら身貧しくゆへハ官子進まん用意ハ思  
ひもよらば高官ハ分り過て真加おそるべくゆせめて勾  
當までも昇らるへくハ殿の御恩よてゆ御側ニ伺候し藝  
を施しゆせんとい業めてゆへハ御意のまふ御奉公仕  
ゆへ一其外何とふよらば廢人ハゆ得共命かきり勤

へ一と控りけるうたてや父の竹井と筑前守とハ敵味が  
知り知さるると情ありし此盲人とも其日の暮ると家  
返り母ハ斯と語るハ母大ふよろこび檢校ふふしゆせん  
との仰あをせよ難有なれ實ハ氏神の我を憐ませ玉  
ふ筑前守の胸間み入らせむひ一あるへなれとて秀吉  
の方をふ一拜みける時理ゆり其後母より總左衛門へか  
りふとのゆぞや廢人ある子を助くる筑前守ハ凡入ふ  
以と嬉しさい心の中を打明細々と筆おいてる文の便  
よ告しゆハ總左衛門も我子の出世ハ悦そしけれとも何  
みせん今ハ互に敵ど一やけいん我子と知へきよし絶  
えぬ一然あから當時智者といえぬ名將ゆりゆ川一り

我子と云ふを探り知これに因として某を弱らせんと  
計策ふやと更ふ心も安む以重代の主君ぬれ共輝元君  
を我子の盲人ふ昇進させよと有りて多くの金銀も賜  
えら一我身上ハ三百貫壹年の藏入残里あくあふ共  
檢校官の積金ふ比ふれいも川あふ三分の一ふ是は  
れハ我子を生るも能木の花さく春逢ふと一夫  
何ぞや筑前守二人ともふ檢校ふあ一呉んとい大量  
く又仁愛の心深しよ一我子と知とてもよも情けく殺  
ハせ一されとも女ハその如きものうかとしたる返事ハ  
あふはと思案ハ日敷を過一けり爰ハ俊都悟都ハ日毎夜  
と筑前守ふ暹近しけさハいつしり親一く相馴て四方山

乃譚くさ自然と表ら路日畑上原ハ不快の容子より  
え一め城中の一二とも委一く語り出敷をこあハ心  
を深く潜め是等か相猜忌ある処より一方便して箭一筋  
玉一箇はひやさハ當城を落させやと思それ々路あ恐怖  
一けれ暫時有て筑前守ハ福嶋市松を呼寄此城中へ使ひ  
ふ汝を遣えは短慮を慎一事を成おふはし小西弥  
九郎を差添る間互ハ宜く申合せ勤むへし中渡され  
弥九郎ハ其方幼年より市中ハ住し且都ふをえぬれて  
人の意趣をささるふ賢一大事の役目ぬ福嶋を助け  
誤ちありら一めよと宣へハ小西福嶋ハ一中ずりハ己答  
一て直ハ打立城門口まで参向一も川案内を通下けり城

中よてハ敵三城を落一其勢破竹の如一と聞ハ定めて當  
城へも寄る形らん其手配を定め各々持場を大切守  
給へ一と約束し弓銃炮を配り狭門切落一と待りけ一処  
なれハ福島小西を早くも見川正一寄手あるか如何  
おれを續く兵士も形く鎧も著を以肩衣袴一も僅か  
只二人笠持草履取ハ此頃もや形小童あり子細を有ん夫  
聞と門の際へ立出れハ福嶋市松正則小西弥九郎行長羽  
柴筑前守の使者と一と參向ハ日畑殿上原殿より入へ  
事ありと云ハ奏者次第傳へけるハ日畑六郎兵衛是を  
聞合戦の時刻を告る使者あるハ夫あらハ面會お及を以  
餘事ハ何事ぞや荒増子細を聞て一と出會をの詮おし追

返とよやといハ桂兼政傍より日畑殿の仰ハさるる  
れとも敵陣の使者ハ面會其禮式あると形り受け聞  
ふ追却さい田舎侍禮義を知るといそれんも口惜一又ハ  
福嶋と云名小怖一と上方お聞えんも願一から以何  
ふも面會し口狀を聞たる上もわくも計らひ方あるへ  
一と云よくり季則も尤おとと城門を開き案内者を出  
一正則をハ本丸へ通一小西をハ二丸へ案内しけり正則  
本丸へ行向ハ日畑ウ郎等出會て書院へ案内正則坐  
ふ著て見よたせ付庭よ科人体の力を引居たり暫く有  
て日畑出來座お著互互會釋し終り季則や福島殿  
あの者は見知あるや如何とけけるおより正則更存不

大関已六編卷之十

アと答ふ季則のさふさふ此者ハ當城ニ召仕小者ふけり傍  
葦の物を盗みし科ふり如斯いさめては生國を羽柴  
殿の領知の者ふけり也此度々切くる罪科の者あり  
か多くは上方まは羽柴殿の領分のものふけり是れ如  
何ある義めてはやらん上方及び羽柴殿の領分ハ盜賊  
の法度ゆるくゆり人の物を掠め取れとを耻といたされ  
ゆ風俗もやと問を正則答ふる様さん何方もて盗賊  
の法度をおゆるしくは但江南の橋江北の枳と申如く土地  
ふよつて物姓の變りゆたれもあり筑前守の領知も生  
れゆても當方お居る時ハ盜をいけりゆと申は全く只  
今居處の地氣あしき故あり存せられゆと云ハ日畑赤面

して辭るく座席表らけて見えたりけり桂兼政傍より福  
島お向ひ御使節の御口狀承るへき苦なれと遙くと御  
出の工つひ敵味方肩衣袴の參會なり御酒一献の上もて  
ゆるく承る里ゆへしと申せは盃酌の間お失禮あらハ夫  
を以て正則を窘めんその計畧なり正則をやく是を悟  
ると云ふもちともしさそわはハ御懇切の御もさけし望  
の外お出さ辱ふしと埃扱おいと志とやかや坐したれハ  
やかて大盃をもち出さ正則は居季則大盃を取上正則は  
向ひ福島殿と某と元より遺恨なし然りと云とも今日始  
ての參會と云敵味方ゆる毒味いけりて進上せんと云川  
つるまくと請ふこれを吞ふ御容も御取上ゆへと申

ふより正則大盃とりあけ、色は桂酌またつて瓶子をと  
る正則とと會釋して盃をいたくさける時季則いご御有  
と立上里猪の跡足を蒲焼ふり出たり正則是を受  
あそれとちあねや往昔雄畧天皇吉野の御馬瀬の御獵の  
時獸肉を膾とて獻里しより兵人部と云氏も起れ里と  
聞及ひいひりねれさそれ天皇の供御ふも奉里しもの  
を正則あんとの御もてねしよ仰付られハ分よ過たる  
御あーらひ辱あーとちへき辭ねしと云川、脇指の小  
刀拔出し猪のあと足を押けり里を多くと喰終り残る  
所ハ傍ふ紙を敷て居置三献の後盃を納めて正則威儀を  
整へ御二人へ入る筑前守り口状を抑今度秀吉當國へ

發向仕いと別儀よゆる普天の下よ住率土の濱を領  
ふから京都へ出仕せし官位小叙授せられ拜賀も行そ  
いよとい近頃の世の習いとありハハへと七實よ王法  
を無し朝威を易しめい非花や毛利家の如きハハハ  
か世子川よ御先祖參議音人卿をえしめ中納言維時匡  
房兩卿の忠勤をも御忘れありハハ御祖父元就卿  
を度々上京ありて御即位の料を獻上ありまたハ大嘗會  
始朝廷の御大禮を勤めしより從三位の先途を遂らま  
川る小御親父以來上京をら禮を臨時の貢税も獻られ  
いよ如何の御心底よあまつま堀目小城を構へ各を差  
置きいと全以て叛逆よ似ていとハ僻とにいハ前將軍



義昭卿ハ勅誡ハ背られ京都を出奔めされぬを毛利家小  
て馳走せられぬも公私の別を知せぬも似たり別所  
小三郎朝憲を恐れぬ干戈を動し争乱を好むを以て誅  
戮を加えしを加勢いたされぬ事全く本人と其罪同一く  
い早く藝州へ下向ありて輝元朝臣上洛いたされぬ様  
勸めあるへく當城の如きハ一日もそやく明退せし  
とのと小いこりとは季則心中小怒ると甚しと云とも元  
就の卒去元龜元年なり今年まで十三年の間輝元一度も  
上洛せし任官の御禮をせしかととも拜賀ハ行なはば義  
昭將軍乃始め頼も勢ら後一時を御請もせされを流浪ま  
しおしける時頼の津小居奉ふの且ハ不敬のとも多か

うき然きハ福島り云処を中関るん詞もなしとて此  
小しと答せたりらんも云甲斐形しとおもひしハ日畑季  
則理非もさかくも某ハ主人の命より當城を守りて  
い然るを筑前守のいそびくまよ、又當城を明て藝州へ歸  
りし事ハ罷成すし主人へ仰られん正其方より藝州  
へ別小使を以て理害を中入るへくゆとや表りハ正則  
聲あらく、又筑前守懇志を以て中入る事を左様いそ  
びく、正近頃慮外千萬とやへしされとも納得なきを強て  
とハやまし只今日の御好ま戰場に於て御面會ややは必  
日畑殿と遣合へし御暇や方々と云川、坐を立悠々と立  
返る扱又小西弥九郎ハ二丸ふて竹井總左衛門に面談し

中ける秀吉拙者小使者を中付ハ深き所存の小事とお  
不しめせ元拙者ハ泉州堺の高人より筑前守取立侍  
ふふし所領多く賜ふ何事おても不自由と中とあくい  
まよよ我主小ハハへとも筑前守ハ卑賤の勤より立身し  
て今百餘万石を領ハ間輕きもの事ハ云よ及よ其その  
上よもの事思ひやて厚く困窮を救ふよ金銀をおしすん  
されとも我身のよは儉約より得ハ藏入の餘分年々小積  
むて幾許と云よを存知不申いと語るさハ是ハ無用の長  
ものかうり嘸くし聞ふく、ねわしめらん大事のよと忘  
れよ此頃筑前守陣中のかくさよ盲人を呼平家をか  
くせよハハ俊都悟都と中兄弟の者殊よ筑前守の氣よ

かなひ日夜傍ふめ一置いてゆる當陣を早く増明と飯浴  
一此二人の盲人を檢校よふしてんと支度してハ彼等拙  
者ふとをさへかく追取立られゆるより考ゆハ彼等  
ハそよ昇進せよも同一と終よハ職といえれ紫の衣を著  
し參内とんとも見えてハ天晴高運のものや並々の者の  
種ふあらよとさゆく尋られゆへとも素性を明さゆの間  
土地のゆの中あて口さくものを求め出し承るまゆハ  
實や御邊の子供とや御覺ありやよ御邊の子おせよ  
弓馬よたゆさる終ものふハゆを以て藝を立る身なり更  
よ斟酌よ及よゆされとも親ありと聞ハ其親よ一通りい  
えて京都へ連行んも本意ゆらゆりて内よ某を以て御

邊へ斷り入ゆてゆて云ハ總左衛門心中ハ深く秀吉の  
實意を感じ且兼子共の母より越たる趣と符を合せ  
一如くおれハ小西の詞を厚く信一何さぬ筑前守の軍ぶ  
りてへて奇正の三川を以て變化自在あると心も詞も及  
それ五五六万の人数あても千二千の兵士もても手足  
の如く小指揮して攻れハ取伐ハ克古今すれある良將と  
云へ一又冠山忍山鎌倉ヶ峯もて日數もかけを人をも損せ  
以落を一調略を以て思へハ當城も終は筑前守り為るお  
とさるへ一幸小我子筑前守の手許ふあまいつらよもして  
筑前守小親一ミより當城の無事を計らるやと思定め小  
西に向ひいつらよも其盲人ともハ某々妾腹の子おいつら  
近

此筑州の御目かけられゆ一も承をてハ然ハ當城の  
正も筑州の御手お入んとい論ふくハ得共同一ハ弓矢  
の上おらてと存立ゆと云ハ小西夫をハ聞ぬよ一にき  
俊都悟都より此包届ハ様頼すれととさ差置を總左衛  
門取て包を開けハ二人の盲人の詞を女の筆より川一て  
云様是ハ筑前殿の賜よりゆ母子送うて萬のよりおひよ  
せよとあれとも度々乃事故餘を分ちまいらさど書志  
る一たり能く見れハ彼等々母の手お竹井元より不如  
意おれとも小西の前を憚うてたや長く取入ともせさう  
けるを行長かたへより何余子息のおく物ハ遠慮ある人  
き正ハ其上は猶御用ゆゆ二人の方へ仰らるへ一

大岡記六編卷之十

十

筑前守と御邊とハ敵と敵なれ共二人とハ父子形ういら  
さる心流うひるいたされそと云ハ竹井も大よ心とけか  
のよろこひろ小西も向ひ只今中を無事の扱を急度仕  
課を中へしと云を小西も聞終又御邊ハ左様おぼそる  
共日畑上原桂ふんこの心底そりかうと云ハ日畑ハ勇  
こて思慮あさく上原ハ心驕る勇氣形掛ハ身上あ  
くもの事合期いささねハ一人ぬきんて、彼是をいそ我  
等何みも力を竭し中へし約束して小西をかへしをれ  
より上原を説く見そやとおもひハ竹井ハ上原ハ宿  
所へと立出ぬ

重修真書太閤記六編卷之十終

重修真書太閤記六編卷之十一

日畑季則横死城中騷動の事

并上原右衛門大夫奥方貞義お死する事  
去程小福島正則小西行長兩人日畑城内お使し本丸二丸  
お入る十分お説得し本陣へかへし筑前守の前へ出て  
けるハ日畑六郎兵衛と御賢察の通し短勇おして智浅く  
己を高ふ人お驕るハ氣色お小間仰の如く仕りゆて心  
頭烈火の如く怒らと餐應の節ハわろくいたしハ處をれ  
も季則をらたくしけよ見えてハ川程よも城中お變  
を生し可中ゆと申けしハ正則ハ短氣おして今度の振舞

えりりハ沈勇ちんゆうよく出来たりと大ニ褒称ほうしょうあり次ニ小西  
 行長ハ竹井たけい面會めんかい仕り兩人にりんの盲人もうじんのそ一々終しゆうてより一  
 て段々だんごふとさふさくゆへハ一兩日中いちりやうにちちゆうハ御計策ごけいさくの如く  
 城中じゆうちゆう小事起じせうおこりへ一と言上ごんじやうけきハ筑前守大ニ悦よろこび今  
 小始こはじめぬと知ら行長ぎやうちやう弁舌べんぜつハ如何いかにあるものおても説とく  
 お不おたられぬとあるへからにや世間よのまへハ大事だいじの男おとこ  
 と賞美しょうびあり然しかも竹井總左衛門たけいそうざゑもんハ恩愛おんあいの闇やみもまよひ負おん  
 因いんの苦くるしみを道みちれんその嬉うれしさ累代るいだいの主人しゆじんをそむき天道てんどう  
 の明あきらる事ことをそをれやつ二丸にまるの大將たいしやう上原右衛門かみはらゑもん大夫  
 をゆたらしそよとおもひ立元たちもと祐すけり宿所しゆくじよは行向ぎやうむかひひ今日けふ羽柴はしばし  
 筑前守ちくぜんしゆうより使者しやしやをさ一越こゆ事御聞ごきこゆひ一もやと問とハ元

祐すけいりおも承うけたま及およびゆと答こたへ竹井たけいお一返かへ一その福島ふくしまと云  
 者ものハ筑前守ちくぜんしゆうの手許てもとふて成人せいじん一なるものそかや使者しやしやの禮れい  
 儀ぎ作法さくぱとこと言語ごんごとてこならに藝州げしゆうおとふも猪いのの焼やき  
 着きを天子てんしの供御くぐ子奉こほう里り一正を存知せいじんのものハ無ないをわの  
 正則せいそくハ其由そのよしを知しゆ加か様やうの侍さむらいをもちゆ秀吉ひでよし未代みだい不思ふし  
 議ぎの大將たいしやうと覺おぼゆゆされハ當國たうこくふ討入うちいれゆと直ちやう子冠こかん忍にん鎌倉かまくら  
 峯かみ三城さんじやうを落おゆ一共手痛こていづき合戦あせん一度いちどもゆたく謀畧ぼりやく  
 のそふ事ことをふゆ一ゆ正せいこと小猿こざる猿ざるの梢せうを傳つたゆり如く  
 進しん早はやくゆて猿ざると異名いめいをゆけられ一由然ゆぜんハ當城たうじやうをゆ  
 こめすし打棄うちすておくへきにハあるゆ一きふ今いままゆ寄よて  
 戦いくさを挑ひせん体ていも見みゆゆハあはらに調畧てうりやくを施ほゆゆ正せいにて

あるへく右衛門大夫殿ハ神通不思議の秀吉と弓矢を  
 執玉ふへきふやと裏とそれ元祐もとより臆病ふして勇  
 智ふけせハ左ハ某も當城の檢使と一々籠定ゆへハ筑前  
 守を怖色ハいたさぬいたく一筑前と合戦日數をふる内  
 一信長出馬あるへ一定めて勢も雲霞の如くゆへ一其時  
 ハ勿く以て當城もちあたえわたるへ一然らハ福島り  
 中と一道理ゆ就て一すつ藝州へ引返しさてのち再度出  
 陣する共おそからしとれもひゆと云より總左衛門中け  
 るハいりふも大夫殿の仰の如く信長の後援あきとハ決  
 一てあるす一信長出陣とあらハ尾張伊勢美濃三河遠  
 江駿河甲斐信濃近江越前幾内の軍勢半役おして十五

六々國めて五十二三萬ハ丈夫ああるへ一然らハ合戦實  
 一難義あるへ一某り思ふ処ハいま秀吉より軍を向を  
 一て使者を差越ゆを縁と一て此方よりも使者を遣え一  
 無事の扱を入ゆとやと存ゆ然るから日畑ハ同心をへゆ  
 らハゆ間彼をハ除き中へ一と相談一事ふれ一者を擇え  
 ておもく向ハ秀吉の陣中の容子を探らる由めと城門  
 を出ハ筑前守の陣中へ使を立先日小西をさ一越れ一埃  
 壱を中述け色ハ秀吉をさや城内ふ變心のもの出來一壱  
 や最早落城遠くら一と悦び使ふあま一引出物ハ上原竹  
 井へ黄金を送り衣服を與へふと一けれハ第一は使ふ立  
 しもの筑前守ハ上方の大將おして百万石餘の大名なる

ぬ我等を近くと招きよせ事の始末をいそる、次第の悪  
 しく然も利害分明ぬ、偽りのまじきとあり、天晴希代の  
 大將あり其上は寶をおし、袋よりかきもかきへを搥  
 る出、給られぬ大氣さよ藝州あともハ見も聞もせぬ  
 正そか、折合くかたはけき、城内の下、川、筑  
 前守か手お流りハ忽ち富饒あるへとあり、その内よ  
 慕ひけり上原も筑前守より音信の懇切あるを悦び何様  
 凡人あら、心中お深く頼も、きものおもひ始終此  
 人よ従ふ、身を安くせよ、と思ふ事おそりなけれ總  
 左衛門ハ、え、めより筑前守お降、後の榮花をそりら  
 んとユ、エ、とあるれハ、事おぬと獨笑して居たりけ

るか上原竹井めかく、秀吉の懇志、いそる、ぬれ、此  
 音藝州へ、通し、この善悪を定め、やと云け、ぬを竹井、熟  
 案、一、答、ある様、大夫殿、ハ、時機を察知ありて、如斯仕合  
 あり、玉へ、と、日畑六郎兵衛、ハ、片意地、ぬ、て、志、わ、武  
 勇、お、ほ、こ、里、我等を這虫ともおもえん、され、ハ、我等、り、ゆ、  
 といへ、ハ、鬼、ハ、ま、ま、と、支、ゆる、と、いつ、も、彼、男、の、曲、を、や、あ  
 ま、あり、の、事、言、出、し、却、ち、野、心、の、もの、ある、とい、を、れ、ぬ、ハ、後、悔  
 是、と、も、詮、あり、る、へ、し、と、云、ハ、上、原、さ、れ、ハ、日、畑、り、日、頃、我  
 等、を、あ、り、と、り、無、禮、を、え、た、ら、く、と、幾、度、と、恥、し、然、ハ、人、知、を  
 う、ち、果、一、あ、ハ、如何、と、い、ハ、總、左、衛、門、さ、思、召、ぬ、者、い、と、手、や  
 是、き、仕、方、あり、此、方、へ、呼、寄、一、問、一、答、の、う、ち、は、種、鳴、を、も、て

打取首を藝州へ送り謀叛の由を檢使より御遣し然る  
へ一云ふより尤然るへして日畑を許へ使をたて藝  
州より急用なりたり速に來臨あるへして申遣はれ日  
畑桂と共に行んとおもへと桂を城中見廻り出でて居合  
を依り日畑一人二丸來る上原出向ひ其方と筑前守と  
懇志は通交する由慥に告知するものあり只今切腹い  
さるへ一家督を折をもつ子息より賜る様を取扱ふへ  
一と云は日畑こいけしからぬ仰ゆる筑前より使節をさ  
し越ゆへとも季則は答禮も仕らぬといへは上原その  
中譯更に立かたし福島正則と酒宴せし懇志ならを  
と云季則大に怒りこれハ軍中乃禮義なり又一川子ハ

計畧のためは福島をもちぬし事何ぞ野心の證據とせ  
んやと云も終らぬ所を鉄炮おき右の助より左の肩へ  
け打ぬきしはさし勇烈の日畑季則うんとこの川けは  
反あから刀を抜く切ゆる處を上原をりさる大袈裟に  
討しは二川となりて失ふけり此争は双方高聲お言  
り合しは上原の妻も付何事あるやとおもふま刀  
提げ次の間乃襖の蔭に立ちし事始末を窺ひおさ  
はる毛利の姫君なり竹井ハ鉄炮取おさめ小聲にいひけ  
る様怖るしは里一季則をかく安々と打止つはあとい  
桂一人ぬり其外ハ大夫殿の御詞次第たるへ但此由を  
内々筑前守へ可やとて硯引寄墨をりぬりし筆を取事



の本末おちもねく記め終里判を居上原の前よさ置ハ  
彼妻女襖のかけより走里出抜打ぬ總左衛門を切てけ里  
女の手とハ云あから精心こめ刀のさえ竹井を其  
息断たり上原まよ仰天こ何事と脇差の柄子手を  
掛能見えハ我妻ねり如何あれハ罪なき竹井をうたれ  
そや氣を亂れぬか云ハ妻女ハ涙を流し竹井罪な  
しハ僻よまよ其文ハ總左衛門り只今書し  
筆の跡名判たあよハ偽とハいそ致海し我夫ハ名  
ありて判をさぬをねハいつくも竹井一人謀叛  
て事をむへし只左様の事及ふまよ知せぬぬ檢使の  
無念の譯ふ御腹めされハへし妾も共も手を組く死手三

途を越川へしといさめられも右衛門大夫命おし三且  
臆病の心より一先逃んと玄關の方へをし里出るを妻女  
ハ未練なり死後の耻辱と刀を取追掛ぬ爰よ竹井り  
甥の三津木匠作主人の姫君とハ言正しく伯父の仇なり  
のゆえに切てぬるを姫君さつ見返里玉ひ伯父を  
ハ知り主をハ知れぬ人てあめと言あから横に拂ひ玉  
ふ太刀鋒をけく匠作ハ胴切ふ切れ其間またふれふ  
是れハ更目もかけを猶右衛門大夫をのがさりと追  
回る爰よ桂源左衛門兼政ハ城中見廻里出處二丸よ  
て鉄炮の音して人のさなく聲を聞何事よと駈付これハ  
玄關より右衛門大夫大手をひろけて走里來里けるか桂

を見るみると其そのまゝ脇わき差さぬききて切きりぬぬる桂かつらを思おも慮りふりく  
子こ細こをあらん押おして容ゆる子を聞きくと鬼おに角かくあららぬ其その所ところへ  
上かみ原の妻つま走は來きり切き先まをどく切き付けられ遂ついに其その場ばに倒たる  
るを起おしも立たて思おも義ぎを忘われし大たい悪あく人にん天てん罰ばつおもひ知し玉たまへ  
と云いふゆわら切き伏ふせしを兼か政せいつと駈か寄よて妻さい女にょの刀やいばを奪うひ  
取と何なに故ゆふゆくの仕し合あせと問とつ書しよ院いんをこれハ日ひ畑はたけ竹たけ井い  
ハ切き死しされ縁えん側がわふ三さん津つ木き匠しやう作さく胴どうを二に川がわに切き分わられて死し  
りけり傍あそばを精せいしく改あらため見みれハ竹たけ井いか手て跡あとの書しよ状じやうあら宛あて  
名なハ小こ西せい弥や九く郎らう殿でん兼か政せいと里さとに披ひらき見みれハ日ひ畑はたけを討うちし  
二にと筑つく前まへ守まもへ告つる文ぶん体たいなり其その時とき上かみ原の妻つまハ起お直ちりてよ  
桂かつら殿でん聞き玉たまへ竹たけ井いり夫おつとを欺あまりて日ひ畑はたけを討うちし秀ひで吉よしへ内うち通とる

を見みとめし故ゆ竹たけ井いを切きころし夫おつとも自じ害がいを勸すすめし臆おそし  
る逃にげ出でし故ゆ追お掛かゆり跡あとより三さん津つ木きか伯おや父ちちの仇あだとき切きり  
けしを打うちて然しか玄げん關かんふり右みぎ衛ゑい門もん大だい夫ぶを仕し留とめたり去いりぬ  
ら年とし來きの夫おつとなり我わが手てふかけしハ一いち門もん衆しゆへ乃すなはち且かつけ然しかハ  
妻つまも自じ害がいせんふり跡あとの事ことよきに頼たのむと宣のたまひて潔いさく胸むね  
ふ及およびおしあて貫つぬりききて死し玉たまふ桂かつらハ始はじめ終しまひを見み届いたけ  
諸しよ侍じを集あめ城じやう中ちゆう内ない亂らんひくの如ごとき上かみハ敵てきかたへも聞きえり  
へし然しかハ防ぼう戰せんおもひもよられいりききも本ほん國こくへ引ひ返かへし  
かさぬり發は向むかへりなりて其その用もち意いめをわり里さとけり筑  
前まへ守まもハ是こゝ由ゆを聞き福ふ島しまに閑かん談だん酒しゆ宴えん日にち畑はたけを亡なしたとなり  
二人ふたりの檢けん技ぎハ一いち城じやうを屠ころるふしきなりける計けいゆふと打うち笑わら

大問己六編卷之十一

二

ひるへハそれと申も大將の方寸をりりの肝膽の仕業  
りて人三ふ感服たりけり

日畑より河邊矢掛高臺宿小至る凡七八里小して備後

國安那郡神邊宿へ夫より今津尾道三原を経て凡十七

八里小して安藝國沼田本郷小達り沼田川を渡り西条

海田を過廣島小至る十二三里をへて三十六七里なり

一云五

秀吉番匠小土地の高下を積らる事

并高松表一里半堤出來の事

爰は羽柴筑前守備中國へ下向していまだ幾月も經さる  
る四ヶ処の城を落し去り共冠山ハ焼亡しける小より其

終りさし置忍山へハ江原兵庫を入置し是を城番とし鐵

倉り峯ハ元浮田の城なれハとて浮田家小かへ一あたへ

給ひ一ハ長船紀伊守三百余騎小是を成る日畑ハ城

中内亂ふよりて自然空城とあり川まハ今ハ此邊ハ高

松の城をり毛利方小清水長左衛門是を成る筑前守

いざらハ高松を攻んとし總軍残ら龍王山へ陣をり

川ハ高松を眼下小見おろし地の理を考へあふ小城を小

高き地小し四方ハ皆深田なり追手の道細くし一騎

打ふらてハ進みかたし城よりハ鉄炮をうち掛關の聲を

發しよせよかれよと誘引とも筑前守これをハ更も三ぬ

ふりおて此城を落して毛利退治將明へくハ力攻も攻

川へ一さきとく此外は鴨庭瀬の城々もあり人を損一兵  
を苦一めく何りせんとく諸軍勢をハ龍王山の南立田山  
鼓山甲山の麓三手村の邊に屯させ本陣をハ赤濱山の東  
なる蛙ヶ鼻と云処に移してて篝遠篝を焼くけ用心嚴  
重に構へ此四ヶ所にて降參せしものを集め料るふ九二千  
餘人ありけさハ百人は奉行一人杖突四人と定め都合せ  
三組ふとけ奉行の印の紙小幡を腰ふさ、せ土俵を造せ  
此外は百姓町人をとひ上土俵一川の價を定めて錢を  
日たけるふより我もくと馳集りて暫時ふ數十万俵を  
積立たり次は陣中へい川も召連ふ大工辻大八多門林  
右衛門をして大井川と乳吸川の水の高さと高松乃地形

の高さを積らせ敷十二間馬踏六間高三間の堤を七十五  
町築立たり土俵の敷七百五十九万三千七百五十俵と云  
一町ふ十万千二百五十俵の割なり十間ふ一万六千八  
百七十五俵なり一間ふ千六百八十七俵半は當る但此  
堤の坪敷廿七あきハ一坪ふ六十二俵半あり今按ふ一  
坪ハ方尺の積二百十六あり二百十六を以て六十二俵  
半を除ハ土俵一箇の尺積三余ふ當れハ今の四斗俵不  
とありあるへし  
水請の方にハ杭を打草を植蛇籠をふせあるとしてやかて  
兄部の川水を堰入しかとも廣き処の事也東ハ蛙ヶ鼻よ  
う西ハ赤えま山の麓まで壹里余の地なれハ急なたる

へりも見つれ共筑前守は快けし見たり堤の上  
商人の見せたふを出させし爰は一年も二年も在陣の体  
ふふしむをゆしも智囊と云きし筑前守も是をうりハ  
千慮の一失ふらんといふ人もあり高松ふしハ是を見て  
あの堤ふし此まき水の川くへきと計りしとのおろあさ  
よと櫓ふ登りしつと嗤ふされとも土地の老たるハいを  
いやあの堤は水の乗時ハ此とたりとへる海と成へし資  
財雑具を高見へ運べと若きをいさむる者も有然るま此  
頃日て里ふし川水も常よりハ浅く山くの小流をかえき  
たる時ふして堤の内ハ川満へしとも見えさうし不とよ  
筑前守の陣中ふても結局無用の堤を築く諸人の朝を請

しとよこて眉をひそむる者もあり秀吉此由を聞ひひ久  
志本左京を召て今幾日たりと過るは雨ふり川水増て堤  
の内ふたふへきや占ひいへとありし時左京笠を取て卦  
を立て占文よりて判断し又星圖を開きて天の分野を考  
ふる小東方畢宿北方大陰の分野よまこそそれハ一兩日を  
過さば大雨降ゆへし然らハ城中水もあゆゆえん疑ふ  
しとけきハ是を聞ゆの信をきし天文卜筮のさし處  
あきららんハ味方勝利疑ふへららばと語り續々日影を  
過しけり

筑前守高松へ向ひしハ天正十年三月のころ又ハ四  
月十二日より廿五日まき高松表陣を居られ廿五日

卯刻より冠山を攻て是を攻落し夫より筑前守八萬全  
駈ふり龍王山へ上り関を作るに三度其後八萬の軍率  
を引きて高松の乾ある大寄山より東南立田山鼓山  
吉備中山其外高松の在家三手村板倉橋の邊まき屯せ  
五月七日高松の東ある蛙鼻へ本陣を移し八日城  
の西にある赤濱山より南へ廻り長一里余廣さ三十間  
の堤を築兄部川をせき入堤の内海の如くふるに  
八大船三艘をうかへ小西弥九郎淺野弥兵衛を警固の  
大將と一日夜いそぎ鉄炮をそふるにかけ関を作るとも  
云

重修真書太閤記六編卷之十一終

重修真書太閤記六編卷之十二

井上有景熊谷陣へ夜討の事

并秀吉諸將剛臆を論る事

扱も久志本左京ハ筑前守の側近くより此頃太白星  
變動一<sup>天宮</sup>小依<sup>光</sup>より<sup>左</sup>右翼星四方小分れ奎昂  
の二星少陽の分小あてて光強く西南小あたり破軍の將  
星昂々然として其光あたか日月の如く太白星の變よ  
り當春北方の紅氣を合を考へゆよ正しく上兩人の禍そ  
勘へずゆ夫よ因り又御開運をおおえゆ御用心ゆへいと  
中志りハ秀吉よくも知をたり必多くもらばとふかれと

嚴重シロウ沙汰サタイ一付イツツケられたり爰ココに備中庭瀨ビチュウテイゼの城シロハ井上豊イノウエトヨシ  
後守有景七百餘騎ゴウシユウキヤクニヒヤクニジュウ不フく楯タテこもりけるか近頃味方チカウキの城々シロ々  
數箇所スウカウショ所落去ショラクキを云イハとも道隔ミチヘリ境サカイを異ヒトにヒてるか故ユに救スふ  
ともあつて徒ツラウに月日を送オクる所此度筑前守蛙ツクノノミハ鼻ハナへ陣チンを  
移ウツせし是天の與アヒある処と云へし道ミチこそ少コトし難ナン所トコロあれ  
一騎打の間道イツキウチノミチより押寄オシヨセハ秀吉ヒデキヨハ本陣ホンチンへハ山壹ヤマイツ川カハこして  
後ノチろ合アヒなり夜ヨよまされて忍シノび入イ上方勢ウヘノセの肝カネを取トりし  
てられへしとて逞兵チヤウヘイをく川カハに三百餘人合辭アヒイヒを定め水ミヅつ  
き結ムスむ日のくるを待マツ待マツたりけり筑前守蛙ツクノノミハ鼻ハナへ移ウツり  
しより所トコロへ人數ニジンを分給ワケタマへハ本陣ホンチンハ小勢コセふてそ有アり  
されとも後ノチの山ヤマを越セハ庭瀨テイゼあり油ユ筋シハあらしと前野庄マキノシラ

左衛門熊谷内膳サエモンクマタニノシハ八百餘騎ヤクニヒヤクニジュウを差添サソ柵サシを付ツて嚴重シロウハ成ナら  
せけり軍奉行イクサノウチハ蜂須賀彦右衛門正勝ハチスガヒコサエノサトシ淺野弥兵衛長政アサノヤシヒロサエノチカサ  
杉原七郎右衛門家次スギハラシチロウサエノケジツ陣目付チンメツケハ黒田官兵衛孝高堀尾茂クロダタケノツチノカミタケノヒロシ  
助吉晴忍タケノキハルニノハ頭カブトハ大谷慶松オホタニケイマツ吉隆仙石キクワンセンシツ權兵衛秀久ケンベイサウキウ神子田カミコノタ  
半右衛門其外諸手の陣ハンサエモンソノソノテノチン々々ツツツさひしく備ツクを立タて夜廻ヨルマし時の  
番急慢バンキヤクマンあくハあはれから數日合戦スウジツカウケンもあつて徒然ツレツレと過スし志シ  
ハ緩ユルるこもハあはれとも退屈タイクツ氣キを見ミへたりける  
中ナカも熊谷クマタニハ役所ヤクショハ山手ヤマテといひ路ミチをせましく谷深タニコホハ敵テキ  
よはるとも僅ツラウハ一騎イツキうちなり何ナニかとのとを仕出シデしへ  
きと朝暮アサキリ狩カを業ノとして日ヒを送オクる井上ハ心ココロをたぶもの  
形カタハ間者マノメを入イれ蛙ウツハ鼻ハナの消息ソウシキをさくらせけるも熊谷

ク狩倉子鹿兎を多く得てこれに調りて亥の刻過る  
まて酒宴して醉臥たる由を聞出し夜討の時あそ到  
れと大に喜びかゝる勝里三百余人二手あむつとお  
分る境の立木の鎧の袖へ青き木葉を志るにさし夜よ  
まされ案内知たる間道より熊谷柵の前へ打よせし間  
をさつと上るやいふや鉄炮をそふりかけ火箭を射て役  
所くふ燃上る火の手を志るへは切て廻る熊谷前野心得  
たりそハ云もの如法夜ふけのどてハあは宵の酒宴よ  
熟睡してさめやらぬ眼をさく籠手をささげ頬をさ  
かけを太刀よ鑓よとむりめく内は井上り手の者そや柵  
を引破るたれ入おめき叫ん攻たりけり爰よりハ筑

前守の本陣も無下は近けきハあを先途と防ぎ戦ふ前  
野も熊谷も世ふゆるされ勇士なり立上りて鎧を合せ  
やよそ五七人突ふせて敵ハ小勢なる上袖ふもゆめと  
ふも青き木の葉をさしたるそ夫を見あては打とれそ下  
知り味方をさけし戦へハ寐をひれしもの共も漸  
これ立かへて打とち切とち一足も引り引あせり合  
し豊後守を目めかくと見えしハ井上も彼等討  
きて無益なりいりふもして本陣あまされ入そと袖ふ  
さしたる青葉の志るしをかるくきて筑前守の在所を  
窺ふ熊谷柵のうちあは入るたれらんあれ其次の陣  
陣あし志川めて音もせし夜討の入りし用心せよと



呼ぶ聲の之聞え川、松明多く灯、立白晝の如く明け  
 れハ混る程くもおおえ以井上かさねて思案、けるハ  
 りる所へ打入犬死せんも口惜、さらハ一歩引、さ  
 ちと元の立場へ操引、引てハ切切、ハ引、川、柵  
 の外へまされ出案内知たる山蔭の鹿の小道を傳ひ、  
 我勢を引、まとい峯を越谷を、たうて庭瀬へあせ、ハ  
 又け、筑前守の陣中、あてハ前野熊谷、手、打、る處の  
 首百餘級、味方の討死八十餘人、手負、ハ二百餘人、と、記、  
 ける夜明け、色ハ筑前守熊谷前野を、め、され、勝敗、を、時、の、運  
 ぶ、よ、日、頃、付、置、し、約、束、を、違、へ、夜、討、は、逢、て、も、厓、分  
 の働、き、感、を、る、よ、あ、ま、り、あ、ま、り、と、て、刀、一、腰、宛、賜、を、う、け、り、次

糟谷助右衛門石川兵助を召れ隣へ夜討のい、一時我  
 陣を能固め柵を越させ、ま、軍令を、守、る、志、神、妙  
 神妙と褒美あり井上豊後守ハ三百餘人の手の者百餘人  
 ハ討れて七十餘人ハ手を負、川、詮、あ、き、夜、討、を、一、て、け、り、と  
 後悔、を、れ、と、も、甲、斐、を、あ、き、去、り、陣、の、一、を、様、軍、中、の、作  
 法、何、も、も、最、重、お、一、て、前、野、熊、谷、の、柵、を、ハ、破、り、一、つ、と、も、夫  
 より奥へハ入、正、か、る、を、以、随、分、不、意、よ、と、た、れ、入、十、分、ハ、狼  
 狽、一、川、の、如、く、あ、ま、り、一、あ、怒、り、取、一、川、め、一、軍、令、の、行、届、き、  
 事、今、ま、て、幾、度、と、如、く、夜、討、一、て、勝、利、を、得、一、正、か、は、し、れ、を  
 然、る、お、昨、夜、か、ま、手、忘、け、く、追、れ、一、正、を、如、き、何、様、凡、人、あ、ら  
 ぬ、筑、前、守、か、る、と、舌、を、ふ、る、う、て、語、を、あ、あ、それ、と、い、お、も、井

上り世に勝れたる武士ぬれハ弓箭の筋をよく知ハぬ  
さるさて筑前守の陣中にてハ夜討の後いよく増々用心  
きひく夜ハ篝火絶間あく晝ハ螺ふささくらと引い川く  
透と伺ふへき手たとも盡て弓鉄の足輕共のせり合まむ  
照しく日をハ送りける然るよ久志本りいひ川る如く俄  
小風起り雲たふ引大兩車軸をふりけきハ四方の谷川  
水増て今までもの笑ひませ一堤のうち忽は満て大浪  
天をひく一志ハ高松の城の塀際まで只一面の水海と  
ありまなり

陰徳太平記は庭瀬の城ハ井上豊後守有景郷人原か  
けて八百をかりにて籠居けるふ此城岡山口ハ沼澤

を帯て一騎うちの細道を通は蛙の鼻の方ハ一騎打ふ  
うけれハ敵多勢やるを得は足輕をかけ城の強弱を  
試まける處ハ豊後守ハさる勇士ぬりける故毎度三つ  
から下知をふして足輕せり合ふ勝とを得り元春隆  
景よりハ庭瀬ハ敵のかたへさし出たる城ぬれハ始終  
守り得んよかたかるへ一唯急き明退れへと下知せら  
れ々れとも豊後守奉まゆといひひふから些も退そり  
以兩陣和睦の後まて抱へ諾おけむとま庭瀬ハ備中  
賀夜郡ふして乳吸川の東あり高松よりハ南ハ當り  
日畑よりハ巽ありあたる  
筑前守ハ堤ハ水の餘を見て又土俵を造ら堤の上

積重ね一ハ水勢いよく増して高松の堀の棟木を  
おけり秀吉堤を巡見一諸將の陣屋を搦らひ加藤福島を  
めいて宣ひけるハ畿内東國の兵ともハ一城をせめ落と  
は近邊にある処の城ともハ攻さるおをの川から退散一  
又多勢を以て發向するを見えハ地の堅固ならず故  
や又ハ大將の勇智の足さるためり一日二日お五十六七  
七もろらくと没落を然るお去年鳥取の城を攻落し去り  
共吉岡大崎の城ハ更し退散をへくもおかじり我扱を  
入人質を取かして後お明退たんおれ  
鳥取ハ吉川經家大崎ハ田公備前守高吉岡ハ安達又  
兵衛あり

其後馬野山お於て元春と對陣を一時松之寄高野宮戸摩  
利已下の城共の容体をこるお攻さるお落へ一とハこえ  
伯耆河村郡馬野山對陣ハ元春六千餘騎秀吉四万四千  
五百餘騎天正九年九月廿五日より廿九日まも也松之  
崎おハ小森空允戸摩利おハ河口刑部少輔久氏高野宮  
ハ未詳  
今又賀茂庭瀨を見るお攻るおさへ落されハ別や攻さる  
を又更し落へき様体よあらば總し畿内東海道中國の  
武士皆勇なりといへとも其中よまた異体ありけだ一畿  
内の兵を敵の虚實をえかいて軽く進まか引く退く故軍  
容よとよ花を散るといへとも坂東の武者お比をハ華盛

ん小して實をく形し東國乃武士を死生を知りて不時  
ハ沼とも川ともいそ以峯をも谷をも平地の如く不思ひ  
掛ると云字を知り逃ると云正を知れされとも短氣あふ  
故久しく守城を多といたくあるひを寡を以て衆に向ふ  
時一旦ハ勇子任て對陣をといへとも久しくこらゆる  
正を得たまへ中國勢ハ掛て一戦をる所をも能く勝べき  
道理をさすまへされハ掛て後又掛て一戦せ以て扱をて一  
戦を及及及ハ千騎一騎あるまても引と形しとき  
く一年播州上月不於て軍はる様をさる又深戦を以て  
めり扱戦ふ及及てやそ一めハ處女の如くあるり漸く  
脱兎の如く不ありて吾思ひ入たる一念をさる許おし

つめされハ死をれとも休をたとへハ泥裏に棘あるの如  
く小して表ハ和あふ見ゆれとも裏面をあらはし剛強なり  
殊に寡を以て守城し小を以て大に向ひ對陣する正何百  
日何十日をふるとても退屈して引と云正形し其事實を  
舉ハ上月に於て對陣せしは吾勢ハ衆く中國ハをく形し  
然共引去おと形く馬野山不於て我を四万不餘る軍勢也  
元春ハをつあは六千不足ぬ小勢あり一かとも橋を引船  
をあかりてよく陣をさるのへ退散せさる一とハ面々存  
知のまへの正之鳥取城中糧尽て馬を食し丸山ハ八人の  
肉を食ひたり一かとも降參を乞え以今高松の体を見る  
不滿水堀をこしたれハ城中定めて簀子かきて居あらん

されとも降参をこそ以て元春隆景不預りたる城をれ  
えと云意地を立ると知きたり然ハ畿内坂東の軍ふくら  
へるハ中國ハよ不難義取ると知へし其中國退治の大  
將ハ柴田惟任丹羽瀧川をとをさし置るこの秀吉を撰ミ  
出されし信長の御眼力を知やと宣へハ加藤福島中村孫  
平次堀尾茂助などい川を殿の軍のあされ様年來御側  
子伺候してさへ分明子推量かさくハ柴田惟任丹羽瀧川  
子勝るふ外も思ひ付不中序の才覺子御示ハえ、やと  
云バされハ其事よ上月對陣の時も柴田あらハ最初切て  
かを無二乃軍をへし然らハたとへ勝たり共味方大分損  
をへし惟任あらハ反間を入る却る敵子計らるるかさ然

くハ信長公の疑をうくへし丹羽瀧川も大形これハ似  
る軍ありあるへし秀吉ハ川もく我軍ハあらハ信長公  
の軍あり勝ハ信長公の勝よ負ハ秀吉ハ拙き故と思ふを  
以て心とをれハ然りと宣ひハ堀尾中村一同ハあと  
云て感心を

是時筑前守ハ蛙ノ鼻乃本陣ハあり見とて實ハ夫男  
ハ身を廻り堤の上下ハかけ並へたる諸將の陣屋を  
窺ひ其行返り又乳吸川の河岸ハ俊都悟都々家ハ入  
る假寐ハ二人の盲人の母ハ腰うたせふと玉ひしと  
あり然るハ是盲人の家ハ此川の渡守然レハ常ハ往來  
乃容た由る正形ありけるハ一日の暮ハ旅僧來りて渡

船を出せよといふ盲人の母今日八日られ及へり渡  
る止むたり今宵この邊に一宿して明日の曉までさふ  
船に乗むへやと云處へ又外郎来てて同く船をやら  
んとを請おあしく明日のとよせよと云ハ旅僧も外郎  
もともふ此家小宿る外郎旅僧も問和尚ハ何處より何  
處へ行あふよやと問僧のいふ貧道を京より安藝へ行  
ものと云僧すそ外郎は吾子ハいつくへと問外郎我等  
を何處とさほ処あそ答ふそらくして夜更たりいさ  
や一睡せんとして枕に付僧ハ直まひひき雷の如く外郎  
む川くそ起る僧の枕上ある包を開き大に驚く時又鶏  
あつ川を告ると喧し因る旅僧も外郎も共起出て

いそぎ船に乗川を渡る中流よいたる比船傾きて旅僧  
外郎とも水中小に墮船頭旅僧を援て南岸に著外郎再  
度船よのり盲人の家小入朝飯を喫終る時一人の下部  
來て船をかる船頭船を出し中流よいて誤り棹を流  
し水に入るとこれを取んと下部の足を控て水中に落  
し懷中の書翰を奪ふ外郎ハをふそち筑前守なり旅僧  
も愛宕長床坊の所化ふして光秀のためふ藝州小使  
たるもの之後の下部ハ齋藤内藏助の弟權内なりと云  
筑前守ふたひ云様高松の城に有者心を剛ふして義氣  
鉄石の如くと云共民を愛し士卒をかあしむとを志すん  
されを此高松よりして堤までの百姓原の家居皆水に入

大月己六編卷之十二

乙

たり其財寶をうゝふひ其老少男女いくをくの憂を起し  
城中五千の人数を以て悉く水屬とありて清水宗治一箇  
の忠節を守らんとせむと天下の民の主たらしむべき器  
ふあらば見よや五七日の内ふハ宗治自害して籠城の諸  
人の命を助けられよと願ひ来るへいとてわかくて左  
ねくしてハかゝるをぬものを遅くして手を拍て笑ひむひ面  
面も此秀吉り運よつれ終ふハ國主郡主ともあるがまし  
忘れても民ハ國の本布かたけれハ國安しと云を心中  
ふ思ひ保川へ武勇をありを名將といせは武あまて文  
をかぬるを以て名將とに攝河泉の楠正成ハ五百餘騎ふ  
て坂東の百万余騎をものゝか共せん三好修理大夫も和

泉河内の主楠がけりへハ河内侍いづれも勇あり三好  
が手ふ付てハ河内侍ふ名有者北条早雲の八千を兩上  
杉の八万を也ぶふい川も關東侍あり同河内侍も正成  
り使を剛勇となり三好り使り臆病なり關東侍もても  
また同一早雲の手ふはけハ一人ふ十人ふかち兩上杉  
も從へハ十人ふて一人ふまくふと全く鷹と馬との如く  
使ふ者よよると知へ  
此次も頼光頼義義家為義義朝義平頼朝義經皆良將なり  
うと云より下信玄謙信赤松山名大内尼子等の論全く  
陰徳太平記ふして香川の論なり更ニ太閤の所論ふあ  
らば因て是を削るいりぬれハ太閤此時四十七歳吉川

大内記六編卷之十一

元春五十三歳小早川隆景四十八歳若りも元春隆景ハ  
 太閤を憐<sup>あは</sup>れおもへとも太閤<sup>たいこう</sup>兩人<sup>にりん</sup>を見る<sup>み</sup>とこれを掌上<sup>てのうで</sup>  
 におく<sup>お</sup>たるか如<sup>ごと</sup>いせんや島津龍造寺を論<sup>ろん</sup>るふ於  
 之<sup>こゝ</sup>ハ更<sup>さら</sup>も太閤を知<sup>し</sup>るものよあはれといふへ  
 兎角<sup>とかく</sup>をるふとも水いよく深くあま<sup>あ</sup>りかハ高松在地<sup>たかまつさのち</sup>の者  
 とも始<sup>はじめ</sup>ハ二階<sup>にかい</sup>へあかり棟<sup>むね</sup>の布<sup>ぬ</sup>り若<sup>わか</sup>そ<sup>そ</sup>ハおらへぬた  
 り<sup>り</sup>か今<sup>いま</sup>ハかふる<sup>か</sup>と思<sup>おも</sup>へるまやたをけむ<sup>む</sup>と泣<sup>な</sup>さ  
 け<sup>け</sup>びける其<sup>その</sup>聲<sup>こゑ</sup>れ<sup>れ</sup>ひた<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>聞<sup>き</sup>えけるふより筑前守<sup>ちくぜんしゅ</sup>兼<sup>かね</sup>て  
 持<sup>も</sup>おさ<sup>さ</sup>たる舟<sup>ふね</sup>を出<sup>い</sup>て老若男女<sup>らうじやくなんによ</sup>をい<sup>い</sup>はれ<sup>れ</sup>こ<sup>こ</sup>とく<sup>と</sup>く迎<sup>むか</sup>取<sup>と</sup>  
 る<sup>る</sup>も本陣<sup>ほんじん</sup>へめ<sup>め</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>扶持<sup>ふぢ</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>や  
 再<sup>また</sup>ハ説<sup>とく</sup>龍造寺隆信<sup>りゆうぞうじりゆうしん</sup>と島津義久<sup>しまつづよひひさ</sup>との合戦<sup>がっせん</sup>ハ天正十三年

三月のち<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>高松攻<sup>たかまつこう</sup>より三年のち<sup>ち</sup>の事<sup>こと</sup>也<sup>なり</sup>義久<sup>よひひさ</sup>天文  
 二年二月九日<sup>にほんにがつくにち</sup>の生<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup>り太閤<sup>たいこう</sup>小長<sup>こなが</sup>を<sup>を</sup>る<sup>る</sup>と三歳



大陽記六編卷之十一

重修真書太閤記六編卷之十一

大陽記六編卷之十一

重修真書太閤記六編卷之十一

